

二〇二〇年度・学力考查問題【国語】

(中学第三回)

注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはっきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は12ページで□・□の二題あります。開始の合図で必ず確認し、そろっていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。また、特に指示のないかぎり、句読点も一字に数えます。

—

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「美幸」は、一年前に父親を亡くし、今、母と姉と二人で暮らしている。近所に住む「木内さん」のことを「先生」と呼び、和紙人形作りを教わっている。「木内さん」も息子を早くに亡くし、今では一人暮らしである。「清人」とは、イチヨウの木の下で知り合い、今では日々話をするようになっていた。また、「原田さん」は、近所に住む有名な漆工芸作家であり、妻を亡くしたばかりで、「美幸」は毎日身の回りの世話をしに通っている。

美幸が原田さんの家を出るのは、たいがい夕方五時ごろである。その一時間後ぐらいに、こんどは清人が訪ねていくようだ。カチ合ったことはないが、美幸にはわかっている。翌日、居間のテーブルに焼き芋いもや小判焼きこばんや、焼き栗くりといった夜食ののこりがころがっている。原田さんが夜なかに買いに出るわけはないから、きっと清人がアルバイト帰りのお土産みやげに持ってきたのにちがいない。

「昨夜、清人くんが来たんでしょ？」

お茶の時間にきいてみると、原田さんは肯定するでも否定するでもなく、あいまいな顔つきになる。美幸としては、そのあいまいさが理解できない。清人が訪ねてきたことを、原田さんがかくす理由は何も無いはずだからである。

「このごろ清人くん、あたしには顔も見せないんですよ。あの人、何

を考えてるんだろ。」

この二週間ほど、清人と会っていない。いつもなら美幸の帰宅をイチヨウの木の下で待ちかまえていたり、木内さん宅で和紙人形を習っているところへおしにかけてきたりするのにも、ふつつりとあらわれなくなった。

「でも、こうして原田さんちに来てるんなら、元気でやっってるんでしょね」

そう美幸が言うと、原田さんはあいまいな顔つきのままお茶を飲み終えて、そそくさと仕事を再開する。これは何かあるわね、と美幸も最近では思いはじめている。

美幸がアパートに帰るころには、もうイチヨウの木のあたりにはだれもいない。

日中なら、たいがい近所のだれかが冬陽のなかに出ている。将棋しょうぎに疲れた菅原さんと強つよが日なたぼっこをしていたり、強が一人で木のほりに夢中になっていたり、ジョンの散歩をしにきた女の子が立ったりする。

夕方の冷たい風が吹きわたる前庭を、美幸は足早に横切っていく。

早くストーブをつけて、母や姉の美穂みほが帰ってくるまでに、部屋を暖めておかなければ。

ちようど階段をのほりかけたとき、

「……美幸ちゃん」

と、後ろから声をかけられた。

すぐに清人だと分かったが、知らん顔で階段を二段ほどのぼった。

「やだわ、こんな寒いところでよびとめたりしないで、と胸のなかで

つぶやいていた。しかし、頬はゆるんでいる。

「なあ、美幸ちゃん、待てよ」

清人の声は、いつものふざけた調子ではなく、意外なほどの真剣さが感じられた。

「あら、清人くん、今日は早いのね」

美幸は、わざとそつげなく言った。

階段をおりると、清人は両手を顔の前であわせた。何かたのみごとがあるようだ。

「これから木内さんちへつきあつてくれないかな。どうしても相談したいことがあるんだ」

「だって、もうこんな時間よ、木内さんにご迷惑めいわくでしょ。……あたしも用があるし」

それはほんとうのことだが、やはり気持ちぐゆるいだ。あとで母や姉に苦情くじやうを言われるだろうが、なんとか清人のたのみを聞いてあげたい。

「でも、いいわ。そのかわり三十分だけよ」

「ありがとう。……木内さんには今朝のうちにたのんであるんだよ」

清人は、もう美幸に背中をむけていた。なんとなく気分つたようすが、美幸には感じられた。

木内さん宅の居間には電気ストーブがついていて、とても暖かかった。

「いらつしやい。……二週間ぶりだわね、清人くん？」

木内さんは紅茶ポットにお湯をそそいだ。さわやかな香りの立ちの

ぼるなかで、清人は神妙しんみょうにかしこまって正座せいざしている。

「それで、どういいうお話なの？」

ポットを見まもりながら、木内さんがきいた。

美幸は心配で、清人の顔を見つめていた。

「じつは、ほく、決心したんです」

清人が咳せきばらいをしてから言いだした。

「ほく、原田さんの弟子でしにしてもらうつもりなんです。漆工芸をやりたいんです」

木内さんと美幸は、ぼかんとして清人をながめた。思いがけない話だった。

「この二週間、毎晩、原田さんちへ行つて、弟子にしてくださいとたのみつづけました。でも、なかなか許ゆるしてくれません」

清人は、そこで木内さんへ頭をさげた。

「それで、木内さんからもお口添せえをお願いしたいんです。おじいさんを説得せつとくしてくださいませんか。どうか、お願いいたします」

「ちよつと待つて、清人くん」

木内さんが思い出したようにポットの紅茶を三つの茶碗ちawanへそそぎはじめた。そのあいだに、清人の言ったことを考えているようだった。

「どうぞ。少し濃こいかもしれないけど」

木内さんは自分の紅茶をすすつてみてから、ゆつくりと清人のほうへ顔をむけた。

「ずいぶんきゆうなことだわね。……ところで、その決心をしたのは、いつごろなの？」

「とにかく小さいときから原田さんの家に行つては、おじいさんの仕

事を見てましたから。ほんとは高校に入る前に、ほくもやってみたいと、ほんやり考えていたんです。……でも、そのころは大学に進学する気でしたから」

「じゃあ、高校をやめたとき、どうしてすぐにお願ひしに行かなかったの？」

「高校を中退して、行くところがなくなったから弟子になるといふのはいやだったんです。それじゃ、おじいさんに申しわけないでしょう？　こうなったからには、もうぜったいに弟子入りだけはすまいと思ひこんでいました」

4 清人は氣負つた感じをみせたが、すぐに、首をかして自嘲ぎみに笑つた。

「ばかだったんです。いま勤めてる建築事務所にしたって、自分にはいまに建築家になるんだと言ひ聞かせてるんですけど、ぜんぜん落ちつく氣なんてないんです。……雑用ばかりさせられて、いまだに設計図の線一本も書かせてもらつちやいなんだもの」

「それは、まだアルバイトだからでしょ。いまに設計を教へてもらへるんだって、清人くんも言つてたじゃないの」

「だけど、それも、いつのことになるやらわかりません。ずっとこのままかもしれないし」

「それで漆工芸にくら替へするわけ？」

木内さんは冷たい表情できいた。美幸もおどろくほど、つっぱねた言ひかただった。

「そうじゃありません。……もともとやりたかつたことなんですから」
清人は懸念に否定したが、木内さんの表情は変わらなかつた。

5 「あつちこつちに氣持ちの変わる人って、わたしは好きじゃないの。……だから、原田さんに口添へすることはできないわ」

「そんな。……お願ひです」

清人の顔がゆがんだ。木内さんはだまって紅茶をすするばかりだった。

「ねえ、美幸ちゃん。……あなただって、氣持ちのふらふらしている人はきらいでしょ？」

木内さんが、そつと目をむけてきたので、美幸はどきまぎしてしまつた。しかし、木内さんの目は、かすかに笑ひをふくんでいた。

6 「わかりました。……もういいです」

清人が立ちあがつた。目のあたりが真っ赤になつていて、いまにも泣き出しそうだった。

「わるかつたね。美幸ちゃん。……用があるのにつきあわせちゃつて」
清人は情けない顔をそむけて、そのまま玄関へと出ていつた。おいかげようとすると、

「まあ、待つて、美幸ちゃん」

木内さんが声をひそめて引きとどめた。

「冷たくしといたほうがいいのよ。みんなが賛成して、うれしい顔をしてたら、あの子、それがあたりまえという氣持ちになつちゃうから」

「それって、どういうことですか？」

「原田さんは内心では、清人くんの申し出がうれしくてしかたないのよ。……でも、清人くんが決心したのは、きつと奥さんを亡くした原田さんのことを想つてのことにちがいないの。氣持ちのやさしい子だからね」

「だから、……おじいさんは」

と、美幸はつぶやいた。——清人くんのことを話題にすると、いつもあいまいな顔になるのは、そのためなのね。

「せっかくなのんでるんだから、清人くんをお弟子さんにしちゃえばいいのに」

「でもね、美幸ちゃん、あの漆工芸の世界はそんなにはあまくないのよ。師匠ししやうと弟子の間柄まがらになったら、そりゃきびしくてね。いままでのようにかわいがってばかりはもらえないの」

「それで、先生は反対したんですか？」

「反対なんかしてないわよ。あの子だって、そう簡単にはあきらめっこないでしょ。……わたしは、あの子の決心を固めさせたわけ」

「いまのが、ですか？」

「そう、あれぐらい言ったら、こんどはやさしい気持ちだけでなくて、相当の決心をいだいて、漆工芸の仕事につこうとするでしょうね。

……そうなれば、きつと原田さんも、清人くんのご両親も、ほつとすると思うわ」

木内さんはほほ笑んでみせ、少しためらってから思いさだめたように話した。

「これは、しばらく清人くんには内緒ないしょにしておいてね。じつは、原田さんの奥さんが亡くなる前に、よくおっしゃってたのよ。自分たち夫婦には子供がめぐまれなかつたけれど、清人くんが小さいときから遊びに来てくれるので、まるで孫まごがそばにいるようだってね」

話しているうちに徐々に目もとがうるんでくるのを、美幸はだまっ
て見つめていた。

「そして、こうもおっしゃってたの。……もしも清人くんが原田さんの弟子になって、あとをついでくれたら、どんなにいいだろうって」
それきり木内さんは口をつぐんだ。

(内海隆一郎『みんなの木かげ』PHP研究所より)

※1 昔むかし原さんと強つた：いちようの木のそばに暮らす住人。

※2 お口添えくちぞ：言葉をそえてとりなすこと。

※3 おじいさん：原田さんのこと。

問一 ——線 a「そっけなく」・b「どぎまぎして」とありますが、

本文における意味として最も適当なものを次の中からそれぞれ選
び、記号で答えなさい。

a そっけなく

ア なれなれしく

イ あっさりど

ウ 不機嫌ふきげんそうに

エ 気軽に

b どぎまぎして

ア ぼんやりして

イ 迷って

ウ うろたえて

エ 活いき活いきして

問二——線1「原田さんは（）再開する」とありますが、この時の「原田さん」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 清人にとって大事な時期を迎えている今、彼に好意を抱く美幸の存在が修業の邪魔になると思い、早く帰ってほしいと思っている。

イ 弟子にしてほしいという清人の申し出を断ってしまったため、清人がもうやって来なくなるかもしれないと気がかりに思い、落ち着かないでいる。

ウ いつも身の回りの世話をしてくれる美幸に感謝するものの、清人と自分との間のことに好奇心から首を突っ込もうとする美幸にうんざりしている。

エ 清人のことを質問する美幸に彼が何をしているかを言うことができないため、話を打ち切ろうとわざといそがしいふりをしている。

問三——線2「知らん顔で（）のぼった」とありますが、この時の「美幸」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 早く家に戻りやらなくてはいけないことがあるので、立ち止まるかどうか迷っている。

イ いつもと違う真剣な様子で話しかけてきた清人の真意がわからないので、警戒して身がまえている。

ウ 久しぶりに声をかけられたことをうれしく思うものの、その気持ちを悟られないようにしている。

エ 思いがけず清人に会えたのはうれしかったが、わざわざ寒い場所までよびとめる無神経さにあきれいている。

問四——線3「木内さんは（）顔をむけた」とありますが、この時の「木内さん」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 大変な苦勞が予想される漆工芸の道に進むのを、清人にきっぱりあきらめさせるにはどうしたらよいのかと、思いをめぐらせている。

イ 清人が妻を亡くした原田さんのために、弟子入りしようとしていることに深く心を打たれながらも、口添えすべきかどうか悩んでいる。

ウ 原田さんに弟子入りを何度も断られ続け、自信を失ってしまった清人を見て、もう一度立ち直るためのきっかけを与えようとしている。

エ 弟子入りを断られたことで、口添えを頼み込んできた清人を落ち着かせつつ、漆工芸の道に進もうとする彼の覚悟のほどを確かめようとしている。

問五——線4「清人は気負った（）笑った」とありますが、この時の「清人」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。なお、「自嘲」は、自分を愚かだと笑うことです。

ア 漆工芸へのまっすぐな思いを熱く語ってみせるが、一方で、かつてつまらない意地を張って本心とは違う選択をした自分を愚かしく思っている。

イ 弟子入りを決心した理由を堂々と説明したものの、その説明のつじつまが合わないことを木内さんに冷静に指摘してきされ、自分でも愚かなことをしたと思っている。

ウ なんとしても原田さんを元気づけたいと思ひ、建築事務所をやめて漆工芸の道に進もうとするが、その自分の愚かな決断に自分でもあきれている。

エ 急に弟子入りを希望するようになったのは、それなりに正当な理由があることを主張しつつ、愚かな自分を見下すような笑いを浮かべ、同情をしてもらおうとしている。

問六 —— 線5 「あっちこっちに（ ）できないわ」とありますが、

この時の「木内さん」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 思わず弟子入りすると言いだしただけの清人を見て、まだその気持ちがあつていないと判断し、今しばらく様子を見ようと思つている。

イ 清人の胸の内はよくわかつているが、原田さんに弟子入りしようという思いをより確かなものにするために、あえてきび厳しい言葉を投げかけている。

ウ 我が子のようにかわいがつている清人が、自分ではなく原田さんに弟子入りしようとしていることをうらやましく思ひ、清人の弟子入りを素直すなおに賛成できないでいる。

エ 漆工芸の道はとて厳しいので、清人の将来を考えてわざと冷たく接したけれども、一方で原田さんの奥さんの願ひを自分の手でかなえてあげたいと考えている。

問七

—— 線6 「清人が（ ）泣き出しそうだった」とありますが、この時の「清人」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の決心がまだ固まつていないことを気づかせるために、わざと怒おこらせようとしている木内さんの本心に気づき、自分が浅はかだつたことを反省している。

イ 大事な将来に関わることでもふらふらするいいかげんな性格を木内さんに指摘されただけでなく、そのことを美幸にも知られることとなり、恥はずかしく思っている。

ウ いつも親切な木内さんならば必ず口添えしてくれるものと信じ、軽い気持ちで美幸と訪ねたが、予想外にも断られ、どうしたらよいかわからなくなつている。

エ 木内さんに弟子入りの口添えを拒否きまひされたばかりでなく、自分の漆工芸への情熱さえも理解してもらえないことをひどくくやしう感じている。

問八 本文について述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 清人は、漆工芸の道を閉ざされ深い失望感を味わい立ち去っていくが、一方で美幸は、必死に自分の道を目指そうとする清人を応援しようとして心の中で決めている。

イ 原田さんの奥さんの思いを聞いていた木内さんは、清人の弟子入りの意志を知りうれしく思うものの、漆工芸の道の厳しさを知るだけに断念させようとしている。

ウ 美幸・原田さん・木内さんは、異なる形ではあるが、みなそれぞれの立場から漆工芸の道を目指す清人を温かく見守っている。

エ 清人は、妻を亡くした原田さんの悲しみをいやしてあげたいと思い、弟子入りを決心したが、原田さんはそこに彼の甘さを感じ、結論を出せずにいる。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いまや環境問題を考えない人はいないでしょう。そして、最大の関心事は、おそらく局所的な[※]ことではなく、地球環境問題だろうと思えます。

これに関しては若い人がとくに敏感です。将来地球が、心地よく暮らせないとこころになりそうな予感をもっているのでしょう。ただ私たちが気になるのは、環境問題の重要性を認識している人は多いのに、それを「生きる」という切り口から考えるべきことだと受け止めている人は意外に少ないということです。変化の原因を科学的に理解して、原因と結果の因果関係を調べたうえで、科学技術で解決しようというのが、地球環境問題に対する考え方の主流です。

地球の温暖化については論文がたくさん書かれ、国際会議も開かれて議論されていますが、温暖化が起きていることを科学的に示し、それが人間の行為の結果であることを証明するのは難しいことです。ボールを初速これだけでこの方向に投げたら、これだけ飛びますというのと同じ意味での科学的理解はできません。

人間がエネルギー獲得のために燃焼させた化石燃料から放出される二酸化炭素が温暖化の原因の一つであることは確かですが、この二つの間の関係は非常に複雑なシステムになっており、一対一の関係ではありません。

ところが、今の社会は、どんな問題でも、最もよい解決方法は、科学的理解をして科学技術で対処することだと思っています。七〇年代

に生命科学が生まれ、生きものとしての視点からエネルギー多消費型の文明の見直しが必要であるとい^⑧あんしてから三十年以上たちました。生命科学研究もかなり進歩しましたが、それを活用して問題解決へ向かったかというところが、事態はより深刻になっています。局所的な河川の水の汚^よれなどは見事にかいぜんされ、一度消えた魚が戻^{もど}っていますが、地球という大きな対象については、基本を決めて国際的に対応する方向にはなっていない。

地球温暖化の原因が何であり、どう対処しなければいけないかということは、科学にこだわっている限りわからないのではないのでしょうか。その一方で、どうも自分の身近な植物がおかしい、何か生きものにとっておかしいことが起きているのではないかという感覚は、おそらく多くの人の中にあると思います。この感覚を活^かかして、それを地球環境の問題にまで広げていくことができるはずで、科学と科学技術による対応でなく、生きものとしての人間の生き方の問題として考えなければいけないのです。

それは、たとえば食べものの作り方、食べ方、捨て方というような例に始まり、さまざまな日常生活を考え直すことなのです。それが価値観を変え、社会のあり方を変えていく。「生きる」を基本に置く価値観の社会は、人間が生きものであるという当たり前のことを、一人ひとりの日常の中で意識することによって生まれるものです。

次の世代に納得のいく社会を渡したいと思うのは当然で、子どもの大切さは生きものの基本であるはずなのに、子どもたちが思いがけない事件を起こしたり、虐待^{さくたい}されたりしています。命が大切だとは誰も

が言いますが、それを大切にしているとは思えない事柄^{じごから}がたくさん起きています。そんな場合、必ず学校の制度がいけないのではないのか、先生が管理を怠^{おそ}ったのではないかと非難されて、事件として扱^{あつか}ってしまいます。このような見方をする、子どもの事件は決してふえてはいない、過去にも小学生による残忍^{ざんらん}な行為はあったという意見が出てきます。

子どもの事件という見方をしてそれを数量で分析^{ぶんせき}したり、社会制度の問題として考えたりするのは、子どもを生きものとして見ていないからだと思うのです。子どもこそ、自然の一部として、つまり生きものとして生きなければ、一人前の大人になれないのに、そのような場を与えずに、科学技術が生み出した人工の世界に早くから取り込んでしまい、本来もっているはずの力を失わせています。とにかく、今というときを、「生きる」という視点で見ていこうというのが本書の立場です。

生命誌^{せいめいし}では、一つひとつの生きものは、長い生命の歴史、生命の流れの中に存在するものと捉^{とら}えます。新しく生まれる一つひとつの個体が生きる過程は、自分の中に入っている生命の歴史を繙^{ひら}くことでもあるのです。人間以外の生きものは、ほとんどその歴史の中にはまり込んでいるのに対し、人間は文化をもち、育児にも新しい技術や新しい考え方が使われますが、子どもの体の中にある三十八億年の生命の歴史は他の生きものと変わりはなく、それを繙^{ひら}くところも同じであり、それを無視した文化はあり得ません。

科学技術文明の恐^{おそ}さは、これを無視しかなないことです。科学は人間にとって大事な知ですからそれをすべて否定するものではありません。

ん。けれども、育児、食事、教育などにもち込まれた科学は多くの場合暫くすると否定されることが少なくないのです。生きものを知るための素晴らしい力を持つ科学を踏まえながらも、あまりにも機械に頼り、欲望をひだいさせすぎている今の科学技術文明とは違う価値観をもち込まないと、人類としての未来は明るくないのではないのでしょうか。

健康ブーム、癒しなど、いかにも「生きる」を基本にしているように見える流行も、社会に受け入れられる基準の一つは、**A**ということなのです。ある成分が健康によいとわかったという触れ込みで、特定の食品が流行します。

最初にあげた地球環境と同じで、人体も複雑なものです。一つの原因で一つの結果が出るほど簡単ではありません。重要なのは全体のバランスであり、小さい頃に生きものとしての感覚をやしない、その感覚による判断があつたうえで、科学や技術を活かさなければ意味がありません。

この他にも、現代社会で問題とされることのほとんどは、「生命」、具体的には「生きる」ということを基本に置いて考えなければ答は出てこない、私はこう考えています。「生きる」について考えなさいという警告があちこちから出ているのだと思います。この警告を、それこそ生きものとしての能力を百パーセント活用して、よく聞き、よく見、よく触れながら考えていくことによって、次世代に生きることが大切にする社会を渡したいと思っています。

そこで、生命について考えるわけですが、生きものとの付き合いは

長いのです。自動車もテレビも、近代になって、科学を基礎に生まれたものですから、それらを知るには、科学的知識が必要です。ところが、生きものは、人類がこの世に登場したときには、すべて地球上に存在しました。私たちが作ったわけではなく、すでにあつたのです。つまり、一番古くから仲間として付き合い合っているのですから、生きもののが一番よくわかっているはずですよ。

それなのに、ここへ来て、生命危機という状況になったのはなぜでしょう。「わかっていないはずですよ」と言うときの「わかる」と、二十一世紀という現代社会の中で言う「わかる」とが、ずれているからではないでしょうか。

現代は、環境問題のところで触れたように、因果関係を理解したときの「わかる」という科学的理解に最高の価値を置いています。これは非常に客観的で論理的ですから、皆に共通する理解になるところが素晴らしく、それを利用した技術も普遍的なものとして生み出せます。私だけがわかったというのではなくて、大勢の人が共有できる理解をもとに語り合えるのですから、よいわかり方であることは事実です。ところが困ったことに、長い間付き合い合ってきた生きものについて科学でわかっていることは、まだまだとても少ないのが実情です。

近年、生物の研究が急速に進んでいることは確かです。その中でもとくに、地球上の生物すべてが細胞でできており、そこには必ずDNAがあるという共通性がわかったことは、他に比べようのないほど生きものへの理解を深めました。その結果、今では、生きものは皆仲間であり、人間もその一つだということが普遍性をもつ知識となり、キリスト教文化のもつあまりにも人間中心の考え方に対して、新しい人

間観を作り出しました。日本には古くからこのような考え方があったので、新しい人間観は、古来のそれと重なり合います。バクテリアに對してまで仲間意識があったかどうかはちよつと別として。

いずれにしても、DNAが明らかにした「わかる」は、私の日常感覚と一致するので、今では私の中で、バクテリアまで含めたすべての生きものは仲間であるという認識は、身に染みついていきます。こういう「わかる」を積み重ねていくと、自分の行動に安心感が生まれます。

ただ、生きものは複雑ですから、こういう幸せな理解ができる事柄は、まだそれほど多くはありません。現代人の多くは生きものとしての[B]理解に自信がなくなっているうえに、科学的理解の方が正しいという風潮があるので、わからないことを無理に科学的にわかったかのようにしてしまふ傾向があるのは気になります。たとえば、「愛の遺伝子」というような言い方は好ましくありません。まず、愛の遺伝子と呼ぶにふさわしいものが見つかっていないこと（雄が雌に関心をもたなくなるような遺伝子の変化はありますが、これを愛の遺伝子と呼ぶのは適切ではありません）、見つからないだけでなく、「愛」という複雑な感情を支配する一つの遺伝子はないと考えるのが妥当だからです。

さらに、各人にとつて大事で、それぞれが自分の中で育てている愛を、遺伝子で理解しようとするところに間違つた科学万能主義を感じます。愛については遺伝子のことなどわからなくなつていいんだという判断があつてよいのではないのでしょうか。

(中村桂子『ゲノムが語る生命』集英社より)

※1 局所的なこと…かぎられた一部分のこと。

※2 生命誌：生物の構造や機能を知るだけでなく、生きものすべての歴史と関係とを知り、生命の歴史物語を読みとる作業。

※3 キリストく考え方：人間は、他の生物よりは優位な存在であるという考え方。

問一 ——線あゝおのひらがなを漢字に直しなさい。

問二 [A]・[B]に入る言葉の組合わせとして最も適当なものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---|-----|---|-----|
| ア | A | 日常的 | B | 技術的 |
| イ | A | 論理的 | B | 国際的 |
| ウ | A | 歴史的 | B | 日常的 |
| エ | A | 科学的 | B | 直観的 |

問三 ——— 線1「地球環境問題」について。

(1) この問題が容易に解決しないのは、なぜであると筆者は考えていますか。その理由として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 国や地域が抱える様々な事情を無視して急いで解決を図ろうとしているから。

イ 周囲の身近な環境にばかり気を取られ、地球全体への視野を持たないから。

ウ 地球の環境は、一つの原因で一つの結果がでるような単純なものでないから。

エ 次世代をになう若い人の意見を取り入れず、従来の考え方にとらわれているから。

オ 科学的に理解し、科学技術を用いて対処しようとばかりしているから。

(2) この問題の解決には、どのようなことが必要であると筆者は主張していますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生きものの生態を知る上で有効な生命科学技術の成果を利用すること。

イ 「生きる」ということを基本に置いて、日々の生活を考え直すこと。

ウ 現代の科学技術を捨て、「生きる」ことを大切にする視点を持つこと。

エ エネルギー多消費社会から抜け出すため、省エネ技術を開発すること。

問四 ——— 線2「科学技術文明の恐さ」とありますが、なぜ「恐

いのですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 子どもの体の中にある生命の歴史が、科学技術によって解明し尽くされてしまっているから。

イ 子どもの残忍な行為を防ぐために、人工の世界の中で子どもを管理しようとしているから。

ウ 科学技術が人々の欲望を大きくさせるあまり、人々から子どもを大切にしている気持を奪ってしまっているから。

エ 長い生命の歴史の中でつちかわれた、子どもが本来持っているはずの力に気づいていないから。

問五 ——— 線3「生きものを『持つ科学』」について。

(1) その具体的な発見について説明した次の文の [X]・[Y] に入る言葉を文中からさがし、それぞれ抜き出しなさい。

地球上のすべての生物には [X] があり、そこには共通して

[Y] があるという発見。

(2) [Y] の発見から、どのようなことがわかりましたか。三十字以内で説明しなさい。

問六 —— 線4 「理解」とありますが、この「理解」の説明として

最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 生きものとしての二十八億年の歴史から生まれた、「生きる」ということを大切にすることによる理解。

イ 日々生きていく中で生きものとして持っている感覚が、科学的な知と重なり合う理解。

ウ 現代になって急速に進んだ科学技術研究の成果に基づいた、大勢の人が一致できる理解。

エ 世の中をより便利にするために生み出された、科学技術に照らし合わせた理解。

問七 —— 線5 「間違まちがった科学万能主義」とありますが、それについて述べたものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で

答えなさい。

ア すべての物事を科学的に究明し、多くの人がわかるようにしなければならぬと考えること。

イ 科学的な判断を優先し、小さい頃からつちかっただけの生きものとしての感覚を捨てようとする事。

ウ 高度な科学技術によって人間の生命を思うように自由に操作することができること。

エ 科学では理解できないことまでも、すべて科学によって理解できると思ひ込んでしまうこと。

【国語】

解答用紙(中学第三回)

受験番号

氏名

得点

問一 a

問二 問三 問四 問五

問六 問七 問八

問一 あ い う え お

ていあん

かいぜん

ふ え

ひだい

やしな い

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

[Blank box]

